



発行
天理教本愛大教会

〒453-0821
名古屋市中村区大宮町 1-60
TEL (052) 461-4326
MAIL mail@hon-ai.org
〒632-0071
奈良県天理市田井庄町 19-1
TEL (0743) 62-0378
編集責任 広報部

年間活動目標を発表

大教会の立教185年の春季大祭が13日、厳かに勤められた。また、12日には教会長年頭連絡会が行われ、2年後に迎える大教会の創立110周年に向けて、本愛につながるようばく信者が心を一つに合わせ陽気に通ることを目指して、「今日を陽気に。」の活動目標（写真）が掲げられた。

陽気ぐらしのキーワード

感謝 慎み たすけあい

大教会の元旦祭後、挨拶に立った大教会長から本年の活動目標「今日を陽気に。」が発表された。

2年後に迎える大教会の創立110周年に向けて、本愛につながるようばく信者一人ひとりが、一日一日を陽気な心で通ることが目標となる。

12日に行われた教会長年頭連絡会で大教会長は、「われわれ本愛につながる者は、一日一日を陽気に通らせていただく。この陽気さは、他の誰にも負けないという気概を持って通ろう」と述べた。そして活動目標

おつとめ おたすけ ひのきしん
天理教本愛大教会

にある「おつとめ おたすけ ひのきしん」について言及し、ご恩報じさせていただくことと、自分だけではなく他の人を陽気にしていくことが、毎日陽気に通るために大切であると語った。

■陽気ぐらしのヒントに

大教会の祭典講話について、今年月次祭の祭典講話を大教会長が行うことが発表された。月々の講話の中で、どうすれば陽気に通ることができなのか、その参考となる具体例を紹介していくとした。

大教会の役員による講話は、入社祭後に変更されることも併せて発表された。

また本年の秋、9月から11月の期間、「おちばがえりひのきしん」を行う旨が提唱された。それぞれの教会、あるいは信者家庭がおちばに帰り、ひのきしんの機会を設けることが目的。

2月のこよみ

入社祭

1日 午前10時

よふき会例会

2日 午前10時

女子青年例会

6日 午前10時

月次祭

13日 午前10時

学生層育成者講習会

13日 祭典終了後

青年会例会

13日 午前10時

布教実修所

14日 午前10時

むつみ会例会

16日 午前10時

婦人会例会

20日 午前10時

こはる会例会

23日 午前10時

本部月次祭

26日 午前9時



現代に生かす

「用木の道」

文・安藤吉人



正月には各地の神社が初詣の参拝者でにぎわいます。多くの神社では二礼二拍手一礼が基本となっていますが、天理教では四拍手です(ちなみに、出雲大社だけは二礼四拍手一礼が正式な礼拝なのだそうです)。今回はこの四拍手について考えてみたいと思います。

以前にふれた「おつとめがなぜ21回なのか」という点と同様、教祖はこの点について明確な理由をお示しくださいません。そこで、多くの先人の先生方はさまざまな角度から思案を重ね、悟りを得ておられます。

教祖ご在世当時に入信され、明治14年から教祖のお

側で御用をされた東海大教会初代会長の加見兵四郎先生のお話を見てみましょう。「かしわでを四つうつのハこれハ四やうつよきようと親神にたのむこ、ろの理をもつて四つうつものなり」(『天理教真理』より)

四という数字を「幸せ」という言葉に結び付けて悟っております。



教祖は『逸話篇』173「皆吉い日やで」の中で高井直吉先生に「皆の心の勇む日が、一番吉い日やで」とお諭しくださった上で「四日仕合せようなる」とお示

しくださっています。加見先生の悟りも、こうしたお言葉を受けて悟られたものかと推察します。

願うだけではない

では、安藤正吉初代会長はどう悟ったのでしょうか。『みかぐらうた講話』に詳しく書き残しておられます。

手を四ツうつという事は合わせる事であつて、第一は親神と人間と心を合わせる、第二は人間と人間と心を合わせ、第三は生物に対して恵みを与える事が合わせる事となる。第四は万物に対して大切に事とする事もある。この四つの合わせる心を神様に喜んで頂きその人の方針をお供えさせて頂くのである。

「どうかこの通り合合わせますから喜んで頂きたい」という事が親神様に対しての孝行の心をお約

束する事と思わして頂く。単に「仕合せ」を願うのではなく、四つの事柄に対して「心を合わせる」ことを、親神様にお誓い申し上げる。その心に親神様は御守護を下さるのだという点に、初代会長様独自の視点を感じられます。

私は普段から、柏手の音がきれいに鳴るように気を付けているのですが、自分の手のひらでさえ、ぴつたりと「合わせる」のは難しいことです。たとえばそれが人間関係であればなおさらでしょう。音が「良く鳴る」ことを「人生が良くなる」となぞらえた悟りも耳にしたことがあります。

相手が自分に合わせてくれることを期待しているだけでは、人生は良くなっていきません。互いが互いを慮(おもんばか)つてこそ、より良い人生になっていく。このことは、初代会長様の教えの根幹を成していると感じます。

連載の内容を YouTube でご覧いただけます！

今回の連載の内容を動画でも配信中！
『本愛誌』連載企画と一緒にご覧いただくと、
より理解が深まります！



チャンネル登録

教理随想

言わん言えんの理を探る



今年の活動目標にある「陽気な心」とは、親

神様の思召がはつきりと映る心です。そのためには自ら努力して、心を澄み切らせなくてはなりません。天理

教典第一章には、次のように示されています。

「親神の思召をくみとれな

いのは、濁水のように心が濁っているからで、心を治めて、我が身思案をなくすれば、心は、清水の如く澄んで、いかなる理もみな映ると教えられた」。

一方、おふでさきには、にちくくをやるのしやん

とゆうものわ たすけるもよふばかりをもてる

(十四―35)

と教えられます。親神様は人間の親ですから、苦しめよう、困らせようなどというお気持ちは一つもなく、それどころか人間を幸せにしてやりたいばかりの親心であります。

にんげんのわが子をもうもをなぢ事 こわきあふなきみちをあんぢる

(七―9)

それではなぜ親神様は、新型コロナウイルスの感染拡大や、個々の苦しい身上や事情を見せられるのでしょうか。その答えは、次のお言葉から悟ることができます。

だんく〜とこどものしゆせまぢかねる 神のを

もわくこればかりなり

(四―65)

「しゆせ」とは漢字を当てれば「出世」ですが、これは地位が上がるという意味ではなく、世の中の埃だらけの状態から抜け出して、心を澄み切らせてほしい、と待ちかねておられるのです。

したがって身上や事情が起きた時に一番肝心なことは、まず自分の心にほこりが積り重なっていることを自覚し、それを払う努力を惜しまないことです。

ほこりとは「惜しい・欲しい・憎い・可愛い・恨み・腹立ち・欲・高慢」という

「八つのほこり」。これに照らして自身を反省し、心を切り換えることが親神様の

思召に適う心使いになるのであります。

■よっぽくの使命とは

こうした親子の心の通い合いを知るには、人間の我が子を思う心情を考えてみるとよく分かるのではない

でしょうか。我が子や孫をかわいいと思わない親はいません。ましてや子や孫が親の言いつけを守ったり、親のために何か行動しようとする時、最大限に喜ぶのが親であります。もちろん

内容は子供の年齢や性別によつて異なるでしょう。しかし親を思う一筋の心でそれを行うならば、内容に係なく親は無条件にうれいのです。この親心を思案しなくてはなりません。

にんげんも共かわいであるをがな それをふもをてしやんしてくれ

(十四―34)

親神様のお望みは、世界中の人間の心が澄み切るこ

と。そして澄み切った心に神の守護を十分に与えることとあります。そのために私たちをまずよっぽくとして引き寄せ、陽気ぐらしの教えを世界へ広める行動を待ちかねておられます。

世界というと遠い外国を想像するかもしれませんが、身近な家族や隣近所も広い世界の一部です。つまり地球全体が世界なら、我が家も隣も世界です。そこに生きるよっぽくとして、

どのように陽気ぐらしを実践し、いかにして教えを周囲へ伝えるか。この一点を考えて実行するのがよっぽくの使命であります。

新型コロナウイルスの先行きがどうなるかはまだ分かりませんが、一日も早い感染終息を祈っておつとめをつとめながら、自らの心を澄み切らせることを最優先に考

え、人だすけの実践を続けていきましよう。

【第86回】

親神様の深い御心を求め心を澄み切らせる努力を

